fab C.

Vol.1

fabC vol.1
2007年1月1日　発行

編集　佐々木杏子 尾上永晃 篠田尚樹 平川聡

発行　伊藤香織都市計画研究室
東京理科大学　理工学部　建築学科
〒278-8510　千葉県野田市山崎 2641
TEL:04-7123-4785(研究室直通)
URL:www.rs.noda.sut.ac.jp/~i-lab/

印刷・製本　祥美印刷株式会社

○ i-lab 2007.

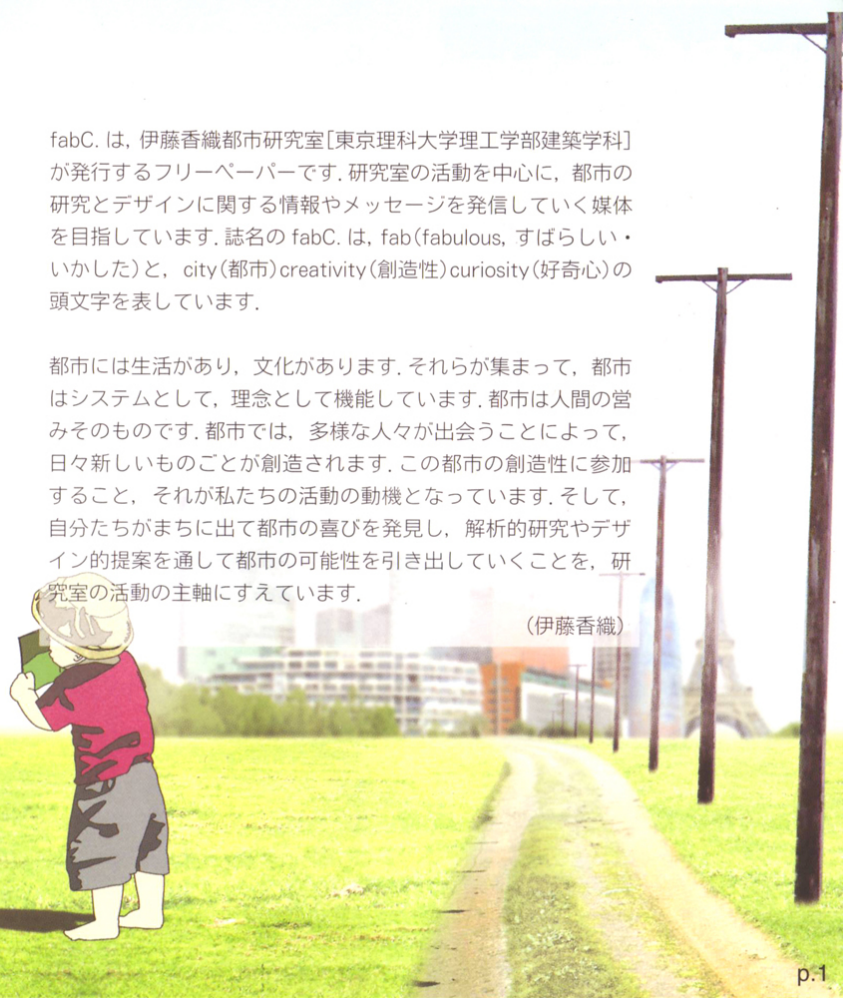
MEMBER

lecturer	伊藤香織	B4	青木はるひ	篠崎哲平
客員研究員	Blaine Brownell		上田恵莉	篠田尚紀
M1	伊藤桃子		大野梨絵	竹川征
	井上美奈		小栗諒	永田乃倫子
	猪俣昌也		尾上永晃	仲村明代
	佐々木杏子		佐藤未央	平川聡
	藤田省三			

fabC. は，伊藤香織都市研究室[東京理科大学理工学部建築学科]が発行するフリーペーパーです．研究室の活動を中心に，都市の研究とデザインに関する情報やメッセージを発信していく媒体を目指しています．誌名の fabC. は，fab(fabulous，すばらしい・いかした)と，city(都市)creativity(創造性)curiosity(好奇心)の頭文字を表しています．

都市には生活があり，文化があります．それらが集まって，都市はシステムとして，理念として機能しています．都市は人間の営みそのものです．都市では，多様な人々が出会うことによって，日々新しいものごとが創造されます．この都市の創造性に参加すること，それが私たちの活動の動機となっています．そして，自分たちがまちに出て都市の喜びを発見し，解析的研究やデザイン的提案を通して都市の可能性を引き出していくことを，研究室の活動の主軸にすえています．

(伊藤香織)



Civic Pride Project

シビック・プライド・プロジェクト

1 プロジェクトの概要

市民がその都市に対してもつ愛着や帰属意識を，シビック・プライドといいます．自分は都市を構成する一員であり，都市をより良い場所にするために関わっているという，当事者意識を伴うものです．拡大を豊かさとする社会が終焉を迎え，地方分権化や都市間競争の伸展が見込まれる日本においても，シビック・プライドの醸成は今後特に重要になっていくでしょう．

都市戦略の中でシビック・プライド醸成のための設計対象となるのが，都市と市民との接触点，つまり，各種メディア，情報センター，イベントなど，都市のビジョンやアイデンティティを共有するためのコミュニケーションのポイントです．都市におけるコミュニケーション・デザインは，都市計画の側面からだけでなく，建築，グラフィックデザイン，マーケティングなどの多面的で総合的に行われなければなりません．

そこで，領域横断的にシビック・プライドを醸成する都市のコミュニケーション・デザインの事例とその可能性を探っていこうとしているのが，シビック・プライド・プロジェクトです．伊藤研究室が中心となって，デザイン，建築，広告，アートなどの専門家が集まり，定期的に研究会を行っています．

2 海外事例調査

2006年3月の海外事例調査では，ブリストル（イギリス），バルセロナ（スペイン），ハンブルク（ドイツ）におけるコミュニケーション・デザインの取り組みについて調査を行いました．

ブリストルの「わかりやすい都市」プロジェクトは，公共空間の整備とサイン計画等の都市情報デザインを統合的に行い，都市を住民や来訪者の親しみやすいものにするとともに，アイデンティティの確立を目指す活動です．都市の体験を通して積極的にイメージを形成しようとする興味深い事例でした．

バルセロナでは，まちなかの旗や種々のメディアで市民にメッセージを投げかけるキャンペーンについて，行政担当者やデザイナーに聞き取り調査をしました．市民に愛されているバルセロナが，市民の力をまちの力にしていること，その際にデザインが重要な役割を果たしていることを実感しました．

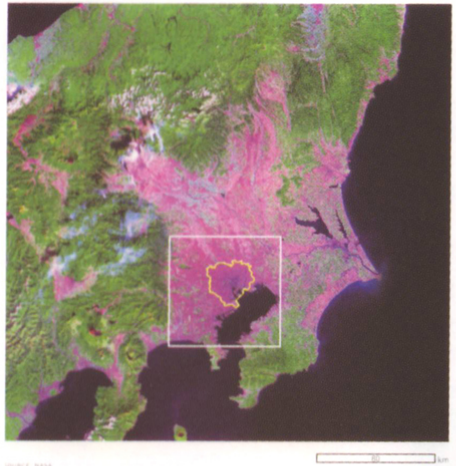
ハンブルクではハーフェンシティという大規模なブラウンフィールド開発の情報センターを見学・調査し，多様な人々に興味を持ってもらうための徹底した“伝える”技術に驚かされました．

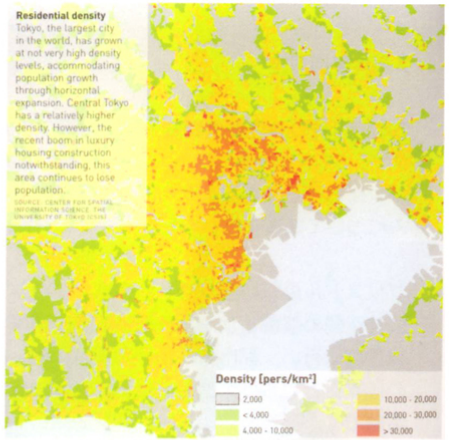
今後より多くの事例を調査研究していく予定です．

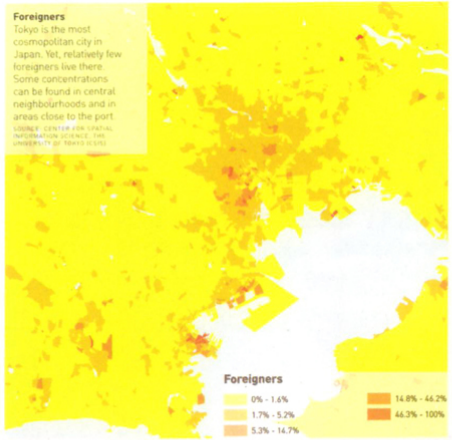
Bristol

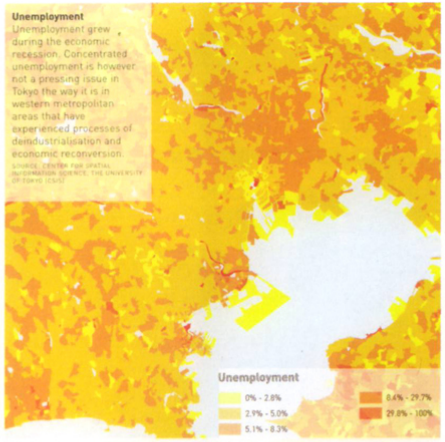
Barcelona

Hamburg









"Cities. Architecture and Society" (Marsilo)より

LA BIENNNALE DI VENEZIA

ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（研究協力）

第10回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の「都市．建築と社会」と題されたメイン展示は，世界の大都市圏を多様な観点でプロファイルし，世界中で起こっている都市の変容について展望を与えようとするものです．伊藤研究室は，展示制作パートナーの一組として，東京都市圏のプロファイリングのために，地理情報システムなどを用いて社会・空間データの整備を行いました．

会場は全長300メートルに達するかつての造船所で，大陸ごとに各都市のプロファイルが展示されました．対象となったのは，ロンドン，バルセロナ，ベルリン，ミラノとトリノ，ヨハネスブルク，カイロ，イスタンブール，ニューヨーク，ロサンゼルス，サンパウロ，ボゴタ，メキシコシティ，カラカス，上海，ムンバイ，そして東京の16都市圏です．

同展での社会・空間データの多用は，都市の状況の量的な把握そして世界の諸都市の比較を可能にしています．同時に，都市の日常生活や都市にインパクトを与えるプロジェクトが示され，都市を多面的に捉える展示となりました．

16都市圏のプロファイリングから最終的に考察がなされ，民主主義やサステイナビリティや寛容な社会の実現のためには，都市を良くデザインすることが重要である，というメッセージが導かれます．展示は，現代都市には建築家やデザイナーが能力を活かす場があり，また活かすべきである，と呼びかける形で終わり，これからの行動へとつながっていくものとなっています．

第10回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展
会期：2006年9月10日～11月19日
会場：アルセナーレ（イタリア・ヴェネチア）
総合ディレクター：リチャード・バーデット
（ロンドン経済大学シティズ・プログラム教授）

PICNIKIOSK
ピクニキオスク

1 ピクニキオスクの制作・展示

伊藤研究室では，東京ピクニッククラブと協力し，ピクニキオスクの制作および展示を行いました．
「GREEN TIMES: 都市の緑で遊ぼう！」展に出展
会期：2005年11月27日～12月25日
会場：国営昭和記念公園みどりの文化ゾーン

2 なぜピクニックか?

歴史を紐解くと，ピクニックは社交として誕生し，都市居住の不自由を補完する空間利用の知恵であったことがわかります．都市居住者の基本的権利として「ピクニック・ライト」を主張し，自由で洗練された現代都市でのピクニックを提案する東京ピクニッククラブ（※）に対して，伊藤研究室では制作等の協力を行うと共に，独自のフィールドワークを続けています．

※伊藤香織他2名によって2002年に結成されたクリエイター・グループ

3 ピクニキオスクとは?

ピクニキオスクは，公園や広場など人が集まる場所に置かれ，ピクニックをサポートする施設です．都市でのピクニックは，手軽さこそが優先されます．ピクニキオスクは，ピクニックセットを持って出かける人も，買い物に出かけた先でふと思い立った人も，それぞれにピクニックを楽しめるような様々なサービスを提供します．たとえば，

・お湯のポットサービス
・氷を詰めたワインクーラーの貸し出し
・ピクニック・ツールの販売・貸し出し
・ピクニック・フードの販売
・インフォメーションの提供

芝の上に悠然と姿を現し，ランドスケープに花を添える小さな建築．コンパクトながら充実したサービスでピクニックをサポートするピクニキオスクが実現すれば，公園は都市生活に欠かせない場所になるでしょう．

DIPLOMA

2005年度
卒業設計

Rings
井上美奈

水辺の音楽ホール
伊藤桃子

銀座の空間特性を延長する
海老根誠治

Tokyo Archi-scape
河上諭

OKINAWA VOID PROJECT
佐々木杏子

ざわざわ下北沢
藤田省三

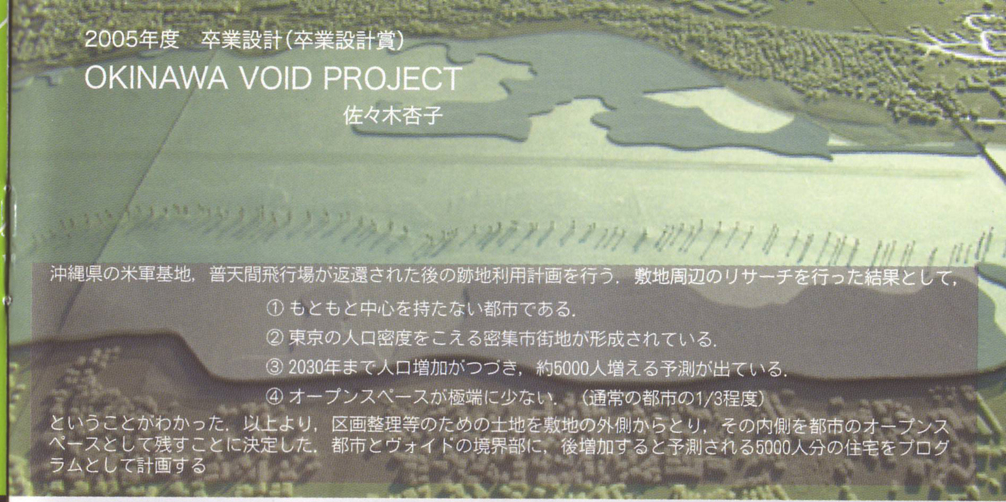
「外苑」で
水野雄介

2005年度　卒業設計

水辺の音楽ホール

伊藤桃子

その空間は，水辺と都市のにぎやかさを内包する音楽の祭典になる．川辺にU字にせり出したホールは，音楽ステージであると同時に水辺を抱え込む新しいパブリックスペースとして，都市に新しい賑わいを提供するだろう．



2005年度　卒業設計(卒業設計賞)

OKINAWA VOID PROJECT

佐々木杏子

沖縄県の米軍基地，普天間飛行場が返還された後の跡地利用計画を行う．敷地周辺のリサーチを行った結果として，

① もともと中心を持たない都市である．
② 東京の人口密度をこえる密集市街地が形成されている．
③ 2030年まで人口増加がつづき，約5000人増える予測が出ている．
④ オープンスペースが極端に少ない．（通常の都市の1/3程度）

ということがわかった．以上より，区画整理等のための土地を敷地の外側からとり，その内側を都市のオープンスペースとして残すことに決定した．都市とヴォイドの境界部に，後増加すると予測される5000人分の住宅をプログラムとして計画する．

2005年度　卒業設計

Tokyo Archi-scape

河上諭

「建設廃棄物の野積み行為は建築ボリュームの形成である」という解釈を持ち得る。

現在建設廃棄物は多くの都市問題を引き起こしており、中でも木くずは処理が難しく、その再利用先が限られている
しかしその木くずは一定の条件で積み上げることにより堆肥へと生まれ変わる。
本計画は上記の解釈により積み上げた木くずを堆肥化し、その後農業へと還元する。
これにより東京臨海工業都市は田園都市へと変換される。

東京の都市風景は一変する。

THESIS
卒業論文
修士論文

2005年度卒業論文

都市ブランディングの現状と可能性
－日本の先進事例を通して－
井上美奈・海老根誠治

非居住利用されるマンション住戸の定量的・定性的把握
伊藤桃子・佐々木杏子・水野雄介

歩行からみた公開空地のあり方に関する研究
河上諭・藤田省三

中心市街地とその郊外部における商業活動の分析
－国道16号沿線地域を対象に－
猪俣昌也・小松芳樹

周辺市街地とのつながりからみた駅前ペデストリアンデッキ
北川博美・廣田佳苗

2005年度修士論文

市民提案型協働事業制度の現状と課題
－神奈川県大和市を事例として－
後藤純

協働事業における事後評価の方法論開発のための基礎的研究
白井章大

市民による地区別計画行政を担う人的資源
－大和市「市民自治区」における自治会を事例として－
高田寛則

市町村合併と都市計画区域・区域区分の再編
梁瀬太一郎

2006年度卒業論文(半期)

地域社会における社会起業家の役割
－多様な主体との連携に着目して－
尾上永晃・竹川征

住民主体の公園管理活動がもたらす効果
－板橋区における公園里親制度の事例から－
小栗諒・篠田尚紀・仲村明代

スポーツを媒介とした地域への参加
－静岡市清水区の事例に学ぶ－
上田恵莉・篠崎哲平

PICNIC INTERVIEW

伊藤研究室では，プロジェクトや研究以外にも年に数回ピクニックを企画して，都市に繰り出しています．ピクニックは社交です．このコーナーは，ピクニックにゲストを呼んでワインやおしゃべりを楽しみながら都市や建築について語り合う企画です．
記念すべき第１回目のゲストは，世界を股に掛けて活躍されているキュレーターの寺田真理子さんです．現在手がけていらっしゃるお仕事や，海外での日本の建築の見せ方，建築を扱うメディア，そして今後の目標などについて語っていただきました．

2006年8月13日 皇居外苑
PM 4:00～6:00

どれもウマそう！

寺田　真理子（てらだ　まりこ）
1990年　日本女子大学住居学科卒業.
1990-99年　鹿島出版会SD編集部.
1999年-2000年　オランダ建築博物館にてアシスタント・キュレータとして，"Towards Totalscape" 展などを手掛ける.
2001年-2002年（株）インターオフィスにてキュレータとして，「ルイス・バラガン――静かなる革命」展を手掛ける.
現在は，インディペンデント・キュレータ，エディターとして活動中.

（以下，寺田真理子さん→T　伊藤→I　学生→S）

S「寺田さんの現在のお仕事についてお聞かせください．」

T「今年の10月にフランスのオルレアンで開催されたアーキラボ展では，「都市に棲む」というテーマで日本人の若手建築家を30人紹介する展覧会を企画しています．周辺の環境に対してどのような関係を持って棲むのか．都市に建てられた住宅作品を主に見せていく展覧会です．妹島和世さん，青木淳さんほか，アトリエ・ワン以降の若手建築家を中心にした建築家が対象です．「都市に棲む」というのは，周辺環境に対して閉じるわけでなく，それをもっとポジティブに受け入れる形で，環境と住宅における新たな関係をつくって棲むことはどういうことか，という問題提起です．都市環境に対してはいろいろと意見もありますが，都市のほうが周辺との関係性がより明確で，建築家の考えがより明確に見えるだろうと考えています．「フランスの都市と日本の都市の違い」として，建築家の作品だけでなく，住環境や都市環境も見せることができればいいなと考えています．ちなみに，もう一人のキュレーターは，鈴木明さんです．

日本の住宅建築は，その建築が建つ背景が面白いと思っています．そこを見せないと日本の建築家の作品の意図はわかってもらえないと思う．住宅なり建築を，リアリティを持って伝えるのはなかなか難しいんです．今回のアーキラボ展ではそれを示すために，住宅環境の写真や映像の撮影方法ではいろいろと工夫してみました．映像では，外から住宅に入って，住宅内を撮って，また外に対してどう向いていくか，という，外部と内部が連続した空間の関係性を見せようと思っています．それから，もうちょっと俯瞰したレベルで都市にたつマンションやビルの住環境を見せたりもしています．映像作品は，実はデジタルカメラを使ってそれらの写真をつないでつくったものなんですが，写真をレイヤーで重ねていくことで，建築の関係性もレイヤーになって多層につながって見せると伝わりやすいんじゃないのかと思いました．映像で試したのは，部屋と部屋との関係性が密な状態や，人と人との関係性．フランスではあり得ない旗竿敷地からではの住宅の建ち方といったことです．日本の土地には様々な制度の問題があり，特に遺産相続のため分割しなきゃならない，といった状況が今の住宅環境をつくっていると思いますが，本当はそういうことも説明できたらと思いますが，写真や映像では難しいですよね．また住宅の周辺環境は場所によって全然違います．例えば，西沢立衛さんの『森山邸』は，すごく密集した2階建ての木賃アパートの雰囲気の場所だし，小泉雅生さんの『自邸』は，郊外で都市開発の行われた穏やかな住宅地にあったり……．そういった周りの環境からその住宅に入ることで，どういうふうに連続した住宅ができてくるか．また，そこに暮らしている家族やその暮らし方も見せたいと思っています．」

I「映像という表現には興味があります．建築作品ではシークエンスが面白そうですね．」

T「妹島さんの『梅林の家』であれば，窓はあるんですが扉が全くなくて，でもその窓の存在が重要で，その窓を通じて親子がコミュニケーションする．「家族の空気感」が窓を通じてある感じが，うまく表せればいいなと思っています．ただ実際には，狭くて引きがないことが多かったりして，撮影者の阿部さんも苦労してるみたいでした．」

S「フランスの人は，日本のどの辺りに特徴を感じていますか．」

T「細い狭い間口２ｍくらいの旗竿地の土地のように，土地を細かく区切って棲むこと，また都市にカラスが多いこと（笑）．日本のカラスは都市の生き物だけど向こうはハトだったりする．北側斜線など，いろいろな規制が住宅の特徴になっていること．あと，ヨーロッパでは若い建築家が建築を次々に建てることはなかなか難しいんです．日本のほうが住宅のコンペの場合，若手にチャンスがある．日本の特徴として持ち家政策があるから，日本ほど一戸建てが多い国はめずらしいと思います．」

S「同じテーマでも，展示が行われる国によって訴えたいところを変えたりするんですか？」

T「国によって特に変えたりはしません．依頼をしてくる人が何を望んでいるのか，どういった展覧会にしたいかという要望があって，そこからどういったテーマで伝えていくことに意味があるのか，また面白いのかということを提案しています．」

I「寺田さんは以前に雑誌の編集をされていたわけですが，ここ数年で，建築系とか都市系の雑誌ってどんどんなくなっていったじゃないですか，その代わり，『CASA BRUTUS』や『Pen』など一般誌のほうでデザイナー誌という形で，作られてはいますが，専門誌は，なんでなくなってしまったのでしょうか．」

T「まずは売れないことが一番の大きな理由だと思います．そして値段が高いこと．私はSDの編集をしていましたが，雑誌の値段が高いばかりか，編集面では取材費がないから取材もできないしインタビューもできない．ということが多かった．でもそういった中で『CASA BRUTUS』では，新しい独自の視点での写真を見せていて，情報の新しさという意味では負けていました．今は日本ではどんどんメディアが増えていますが，『CASA BRUTUS』などは，ある種のブームだという気がしています．というのも，特集の内容も繰り返してあったり，新鮮味がなくなってきているからです．結局，彼らにとっては「建築」は消費の対象なんだと思います．一方で，それは日本人のメンタリティでもあると思います．いつも新しい対象を追いかけている．六本木ヒルズの次は表参道ヒルズという感じで．」

I「つまり，一時的なブームに乗ってBRUTUSが少し手を出したのがCASA BRUTUSだと，一般誌は裾を広げるのには役に立っていると思いますが，寺田さんのおっしゃるように結局はブームなのだと思います．でも，専門家としては，いろいろと情報を得なければならない．やはり専門誌は重要だと思います．たとえばSDの海外情報は貴重だった．有志と情報交換の研究会をやっていて感じることは，メディアにかかっている責任みたいなもの」

T「やはりメディアとして，問題提起や明解なメッセージや新しい情報を発信していくことが重要ですし，海外情報では今何を問題にするか，といったテーマを若い人たちで散々議論してきました．」

I「だから，寺田さんのような方が重要だと思うんです．昨日もちょうど日本橋の首都高埋設についてのシンポジウムがあり，情報不足のまま議論することの不毛さ，メディアが大切だどういう話がでました．単に埋めるという話だけでなく，実際にはいろいろな計画があることなど．もちろん自分からアンテナを張っていくのが大前提なのですけど，知る手段がないのはやはり大きな問題だと思います．」

T「ただ私にとって，建築・都市のメッセージを伝えるときに，雑誌なのか，展覧会なのか，建築そのものを見せることはできないから，その建築の情報を伝えるときにどのような媒体が良いのか，自分自身のなかで迷いながらいつも選択しています．今後も建築メディアのあり方は追求したいと思っています．ただ自分の職種を何と呼ぶのか難しいところですね．キュレーターでもない，編集者でもない……．」

I「同時代的な動きみたいなものを紹介してくれる方がいてくれると良いなと思います．寺田さんのような人はとても重要な人だと思う．」

T「がんばります！」

「寺田さんは，メディアをどのように扱っているんですか？」

T「テーマによってメディアを選んでいます．それぞれふさわしいメディアあるはずだと思っているので，いろいろ試みたい．展覧会の場合も，写真とパネルと図面があるとかではなく，もうちょっと新しい建築の見せ方ができないものかなと思っています．」

「対象としては，一部の人をターゲットに考えているんですか？それとも建築を広く人に知ってもらうために，割と全体を対象にしているんでしょうか？」

T「建築専門の人と興味を持っている人の両方ですけれど，裾を広げすぎると言葉のレベルが違ったり伝える手段も違ってくるので難しいと思います．もちろん建築をやっている人に何か新しい方向性なり考え方を伝えたいのですが，その中で閉じていてもしょうがないとも思うのです．ある程度の社会性を持った言葉で伝えるということがどういうことか，ということは常に考えたいですね．難しくても，ふだん建築の中だけで通用する言葉だけでなく，それ以外の人にも伝わる言葉で，しかし安易な言葉を使ったり，わかりやすくしようとするだけでは，建築家の人に相手にされない．ちゃんと建築の世界と社会とを繋げられるようなものはつくらなければならないんじゃないのかなと思います．」

「SASA BRUTUS」だけじゃなくて，一般の人でも興味のある人には，レベルの高いとこまで足を踏みこめるような入り口は作るべきなんじゃないのかなと．」

I「だからといって安易に歩み寄るべきではないと」

T「建築は消費ではないと思っていますから，いかに自分たちが心地よく暮らし，良い都市だと自慢し，ここを愛していますと言えるか，ということが大事だと思っています．自分たちが楽しいと言えるような都市になれるような環境づくりに少しでも貢献できればいいなと思います．」

I「この間バルセロナに行ってきたのですが，バルセロナの人は心からバルセロナを愛していると言っていました．」

T「私はしばらくオランダにいて，オランダは好きだけど，住んでいると嫌なところが見えてきます．だから世界には完璧な都市はないんだなと思います．バルセロナも，住むと不満はあると思います．完璧ではなくても，ここは好きとか，本当にここは愛しているとか，嫌な部分よりも愛す対象が多くあれば良いのだと思います．時間はかかると思うけれど．」

S「海外で展示をするときと，日本で行うときでは意識的な差はあるんでしょうか？」

T「外国に行くと自分が日本人であることや，日本って何なんだということを意識せざるを得ない．外国に住んでいるとやはり日常的に日本についていろいろと聞かれます．日本ってこうです，東京はこんなに素晴らしいんですということはやっぱり伝えたいです．外国の人に日本文化や社会の面白いことや素晴らしいことは知ってもらいたいという気持ちは素直にもっています．もちろん，むこうのいいものを吸収したいという個人的な気持ちもありますが，外国で仕事をすると，自分の国の本質についてあらためて知りたくなるし，実は知らないことが多いなということに気づきます．オランダでの展覧会のために，日本の農村や漁村を見たりする機会があったんですが，そこで改めて日本を見るとこうなんだ，とか新たな発見が結構あったりしました．伝統的な美しさや考えがあって，それがまちや都市のデザインになったりする．

　私は，実は建築家の作品それ自体よりも，それができる背景により興味があります．以前SDでアジアの特集をやったときも，作品そのものや建築家やアーティストに焦点を当てる一方で，どうしてこういった人が生まれるのか，その土壌みたいなものとか，そこでしか持ち得ない文化性とかに興味があって，やはりそこから生まれるんだよということも伝えようとしました．」

S「今後の野望，究極の目標などがありましたら聞かせてください．」

T「都市をテーマとして仕事をしていて，最近はよく『教育』が重要だと思っています．

これからの世界をつくっていく若い建築家たちが希望を持たなから，未来の社会や都市に対して提案していってほしい．そのためには，教育が変わらなければならないと思うんです．何をやっていくべきかを見定められる人材を育てる教育．そういったきっかけをつくれるようなことができたらいいなと思っています．それを来年4月にスタートする横浜国立大学院／建築都市スクール”Y-GSA”で試すことができれば思っています．」

I「色々なお話を聞かせていただき，ありがとうございました．」

S「ありがとうございました．」